

決断力 橋下 徹 著

単行本：202 ページ

出版：PHP 研究所

価格：990 円（税込）

はじめに

弁護士・タレントとして名を馳せ、大阪府知事や大阪市長を務めた筆者による意思決定術を紹介します。絶対に実現不可能だと言われた難題の実行を支えてきた「決断力」とはいったいどのようなものなのでしょうか。

決断は割り箸で

今の日本に圧倒的に足りないのは「決断力」である、という強烈な書き出しから本書は始まります。ビジネスでも政治でも、人並み以上の決断力を求められてきた筆者だからこそ、周囲の決断が緩慢に見えるときもあるでしょう。とくに組織のトップともなると、そこまであがってくる判断の難しい問題は、メリットもリスクもほぼ同等であると言えます。そんな問題を前に、絶対的な正解を求めて決断を先延ばしにすることは、決して正しい選択とは言えません。

割り箸を立てて右か左か倒れた方に決めるしかない。そんな感覚で決断しなければリーダーは務まらない

この一文に、素早い決断に重きをおく筆者の考えが表出していると言えるでしょう。

手続的正義

とはいえ、本当に割り箸の倒れ方だけに全てを委ね、判断材料にすることが正しいというわけではありません。迅速かつ妥当な決断を下すために必要になるのが「手続的正義」という、筆者が弁護士の卵時代に衝撃を受けた考え方です。対するのが「実体的正義」と呼ばれるもので、こちらは結果の内容そのものに正当性を問う考え方です。

「手続的正義」とは、結果に至る過程・プロセスに正当性があるなら、正しい結果とみなす、という考え方です。

根も葉もないことを言ってしまうと、100%正しい結果を生み出す決断をすることは不可能でしょう。どれだけ確実に思えたとしても、あくまで確率が高いという程度であり「絶対」ということはないわけです。

実際には、前述した通りメリットとリスクの割合が同等に近い、あるいは近しく思えるほど見通しの立たない問題の方が多くはないでしょうか。そのような状況でリーダーが携えておくべき考え方が「手続的正義」であり、結果もさることながら、あらかじめ手続きを決めておき、みんなが納得できる結論を引き出す仕組みづくりをしておかなければなりません。

事前のルール作りを厳格に

どんな組織で、どんな問題が挙げられたとしても、所属する全員の意見が完全に一致することは皆無であると言えるでしょう。表面化しないだけで、反対意見や不満を抱えたまま苦しむ人がいるかも知れません。しかしながら、決断の末に手に入れられる結果は1つだけ。全員が満足できる結果を導き出すことはできませんし、かといって全会一致を理想として議論することも避けるべきだと本書内では述べられています。それこそ迅速な決断とは程遠い議論方法であるからです。

重要視するべきは「手続的正義」を意識した、厳格なルールを設定しておくことです。そうすることで、反対意見を持つ人にもプロセスには納得してもらい、最終的に抱えるネガティブな感情を少なくすることができます。筆者は政治家時代に革新的な政策を推進してきましたが、その取り組みを支えたのが「手続的正義」だったというわけです。世の中が混迷を極め、公私ともに大きな決断がしにくくなっているこの時代において、意思決定のスキルを学びたい方にオススメの一冊です。